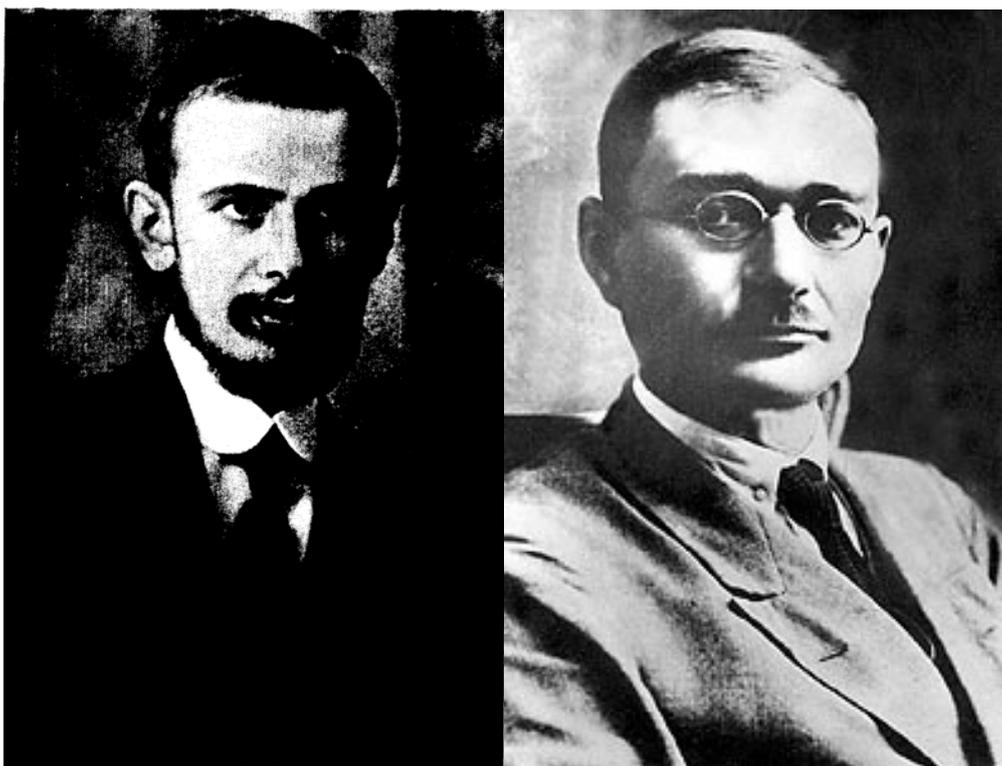


第一章

ソヴィエト連邦の言語政策



Е.Д.Боржаванов(左)とН.Я.Якоблев

第一章 ソヴィエト連邦における言語政策

- 1-1, ラテン文字化政策期
- 1-2, キリル文字化政策期
- 1-3, 「国際」的な語彙の問題

ここでは本論を検討する上で、背景となるソヴィエト連邦全体の言語政策の推移に関して考察していきたいと考える。

大きくラテン文字化政策期とキリル文字化政策期に分けたが、ここでは主に文字と民族政策に関わる問題を検討し、「国際」的な語彙の問題では、語彙に関する政策に関して検討していくことにする。

1-1, ラテン文字化政策期

ラテン文字化運動の進行過程

1922年、アゼルバイジャンではそれまで民族語に使用していたアラビア文字を止め、ラテン文字で表記しようとする主張が現れ始める。レーニンはこのラテン文字化の報せを聞いて「東方における革命である」と語ったという。

ロシア帝国領内において民族語のラテン文字化の試みはこれが最初のものではない。後に語るように1910年にはブリヤートのバザル・バラディンがラテン文字化案を発表し、1919年には当時ペテログラード大学の学生であったヤクート人ノブゴロドフによるラテン文字化案も存在していた[Новгородов(1977)]。

アゼルバイジャンの試みは、一地域の試みに終わった上記の二つの文字案と違い、中央政府の承認するところとなり、ソヴィエト連邦で全国展開されることになったことが違うのである。

1926年2月26日から3月6日まで、アゼルバイジャンのバクーにて行われたテュルク学会議において、ソ連邦に住むテュルク系諸民族が民族語を表記するのに用いる文字としてラテン文字が採用しよう決められる。このラテン文字化には、カザフ語のアラビア語文字表記を考案したカザフ人のバイトゥルスン（ロシア語名：バイトゥルスノフ）などが大反対したことが知られている[Аншин, Алпатов(1999); Тамір(1999)]。アゼルバイジャンにしてもアラビア文字に若干の改良を加えてあくまでもアラビア文字を守ろうとする改良論者と、ラテン文字論者との新聞紙上での争論が1926年まで続いたという[森岡修一(1974), 16]。また当然アラビア文字と深く関わりがある、宗教界の人々からの反対もあった。しかし、会議の前の年から各地で参加を呼びかけていたウズベク人ハリード・セイド・ホジャーエフが同時にラテン文字化の根回していたことから考えるとすでに既定の路線になりつつあったようである[Toker(1999)]。

なお、この会議にはトルコからの代表も参加しており、1928年トルコ共和国においてトルコ語を表記する文字として、アラビア文字の廃止とラテン文字の採用にも強く影響し

た。

同年、モスクワでおこなわれたソヴィエト連邦中央執行委員会通常会議で、アゼルバイジャンの政府中央執行委員会議長であり、ラテン文字化改革の指導者の一人であったC・アガマルィーオグリを代表者とする新テュルク文字全連邦中央委員会の創設が決まる。同中央委員会はモスクワではなくバクーに設置された。翌年行われた同中央委員会第一回幹部会で7月1日には統一アルファベットの計画が承認された。採択されたアルファベットはアゼルバイジャンで使われているものと完全に一致するものではなく、アゼルバイジャン語のアルファベットは徐々に統一アルファベットに移っていくこととされた。

ソヴィエト連邦建国当初、その他のテュルク系諸語はアラビア文字を維持するか（タタール語など）、文字がない言語の場合にはアラビア文字をあてがおうと試みたところもあった[Исаев(1979), 90,105,160]。しかし、委員会の創設を機に一度はアラビア文字を自らの文字として採用していたテュルク系の諸民族も、この新テュルク文字を基礎としたラテン文字化をしていくのである。

1929年8月7日には、ソヴィエト中央執行委員会および人民委員ソヴィエトで「ソヴィエト連邦内のアラビア文字を使用する民族の新ラテン文字について」という決定が出され、アラビア文字を使う連邦内全ての機関にラテン文字化が通達される。

ラテン文字化に最も、頑強にラテン文字化を拒んだのは、アラビア文字を改良して使っていこうと考えていたタタールであった。また、アラビア文字での識字率は当時20%を超えており、ロシアのムスリムの中でも文化程度が一番進んでいた。そのタタールも1930年にラテン文字化を決定する[Исаев(1979), 96]。すでに独自のラテンアルファベットを使っていたヤクート語においても1929年、ノブゴロドフ式のラテン文字に代え、この新テュルク文字アルファベットを採用する[Исаев(1979), 104]。また、この運動は国境を越え、1930年代に新疆のウイグル、カザフ、キルギス人たちにも及び、1930年6月28日、当時は独立国だったが1944年にソ連邦に併合されるトゥバ共和国のトゥバ語においてもラテン文字化が発表されていく[竹内和夫(1997); Исаев(1979), 112]。

新テュルク文字連邦中央委員会は1930年8月15日のソヴィエト連邦中央執行委員会民族会議幹部会の提案によってモスクワに移され、新アルファベット連邦中央委員会と改称される[Исаев(1979), 228]。そのころすでにラテン文字化運動はテュルク系の言語だけでなく、カフカスの様々な言語やペルシャ語系の言語、フィン・ウゴル系の言語やシベリアの諸言語にも全ソヴィエト的に広まっていた。1932年の時点では66の言語がラテン文字化し、さらに7つがラテン文字化に向かっているとされていた[Яковлев(1932), 34]。

また、驚くべきことに、他の文字からのラテン文字への文字の移し替えや、ラテン文字による民族語を表す文字の創製は、テュルク諸語のような大言語だけでなく、以下に挙げるような人口5万人以下の少数民族にもおよんでいたのである。

言語	ラテン文字化の計画期間	言語	ラテン文字化の計画期間
アバジン語	1932-1937	アレウト語	1932(使用されず)
イジョル語	1932-1937	イテルメン語	1932-1937

ウデヘ語	1930年代初め-1936	ヴェップス語	1931-1937
エヴェンキ語	1931-1936	イヌイト語	1932-1936
オロチ語	1930年代初め(使用されず)	ケット語	1934(使用されず)
コリャーク語	1932-1936	サーミ語	1933-1936
セリクプ語	1932-1937	ショール語	1930-1937
タット語	1920年代終わり-1937	ツァフル語	1934-1938
チュコト語	1931-1936	ナナイ語	1931-1936
ニヴヒ語	1932-1936	ネネツ語	1932-1936
ハンティ語	1931-1936	マンシ語	1932-1936

[Казакевич(1994), 56-57]

ラテン文字化のイデオロギー

もともと小さな火だったラテン文字化は、中央の承認により、燃え広がっていくわけであるが、広まるには、地方の事情と中央の事情がうまく重なり合った現実が必要であった。

「文字を知らないものは政治の外にいる」というレーニンのことばを旗印に、革命当初から識字教育が展開される。が、ロシア語を知らぬものに対しても同様に、政治宣伝をする必要があった。劇あるいは映画などを使った政治宣伝も行われるのだが、一カ所に人を集めて時間を決めて宣伝することより、文字によるメディアのほうが時間に縛られずに広範囲に宣伝することができる。このためには、まず、民族言語を文字化しなければならなかった。現地での文字への親しみやすさなどを考え、当初は、イスラム地域であればアラビア文字で、ロシア正教などの影響の強い地域にはキリル文字で、民族語に文字を与えることもあった。

こういった状況で、ラテン文字化が登場する。ラテン文字については「革命の文字」という表現の他に、今までロシアの搾取者、聖職者たちの文字であるキリル文字をさけて採用した文字であるという説明がなされてきた。少数民族を搾取してきた植民地主義者・聖職者たちが押しつけた文字であるキリル文字を使うのは、抑圧を喚起してしまう恐れがあるというのである。また、ラテン文字化と相対するアラビア文字の背後には、イスラム教があり、そして、イスラム世界があった。革命当初においては、アラビア文字を使おうという人々の勢力も強かったが、ソヴィエト政府は最終的にはそのような動きを放置せず、運動を抑圧し、ラテン文字を支持する方を選んだ。とはいえ、当初はソヴィエト政府もアゼルバイジャンのラテン文字化に対し支持をためらっていた。中央政府が支持の姿勢を取り始めるのは1926年、テュルク学会議の直前であったとされる[Smith(1998), 126 ; Martin(2001), 187]。「民族のアイデンティティと言語を統合する手段であったが、汎イスラム感情に対する対抗措置であった」とナハイロとスヴォボタはテュルク諸語のラテン文字化について述べている[ナハイロ、スヴォボタ(1992), 122]。モンゴルにおいても、学校教育を行うための教科書が不足し、それを補うために仏典やラマの伝記、説話集が使われていた[Хувьсгалын(1967),170-171]。文字を変えれば「古き悪しき」宗教や伝統を断ち切り、

民衆をソヴィエト政府の作る「新しい社会」へと導くことができる。そこにラテン文字化の一番大きな意味を見いだしていたのではないだろうか。当初、中央はラテン文字改革を「搾取する封建領主」や「害毒である宗教」を否定し、「文明」を受容するための運動と見ていたのである。

しかし、この運動に関する議論の中心がテュルク系の人々の言語に集中したことは、運動が汎トルコ主義的性格を帯びていたことを示しているかのように思われる。中央の承認する国際的な文字であり、植民者や宣教師たちからの文明的開放を意味する文字としての性格を前面に押し出してはいたが、その裏に汎トルコ主義的な性格があったことが、後に中央政府がラテン文字化を否定する方向へと政策を転換する大きな要因になった。

なお、ラテン文字化運動はラテン文字という「全世界共産主義共同体文字」¹による、ソヴィエト領内の言語とその周辺の諸言語の文字体系・表記の統一への志向を含むものでもあった。

そのために新アルファベット全連邦中央執行委員会のような統一を実現させるための組織も存在していたのである。この委員会では言語毎に様々なテーマを設け、担当者が任命された。北カフカスを主に取り仕切ったのが、表紙の写真にあるヤコブレフであり、中央アジアの諸言語に関しては同じく表紙の写真のポリヴァノフが取り仕切っていた [Алпатов(2000a), 51]。モンゴル諸語に関しても、後に検討するようにポッペなどがその任に当たっていたのである。

一つの音声に対して一字をあてる統一的な文字体系を全ての言語に使用させるためアゼルバイジャン語や、ヤクート語のように、すでにラテン文字のアルファベットが存在していた言語に対しても、同一の原則への統一が図られた。もちろん、場合によっては、子音と母音の合計がかなりの数に上るため、煩雑になり、かつ印刷する活字の数が多くなりすぎることへの懸念もあるため、節約する方法も提案されている [Яковлев(1932)]。

そして、統一は「東方」を超え、遂にロシア語に関してもラテン文字化を検討する論文が現れる。1930 年に出版された『東方の文化と文字』の第 6 号に載った、ルナチャルスキーとヤコブレフのロシア語のラテン文字化に関する論文がそれである。 [Яковлев(1930);Луначарский(1930)]。同様のラテン文字化は、ウクライナ、アルメニアでも提案されていた [中澤英彦(2001),81 ; Martin(2001), 199]。また、ペルシャ語や、朝鮮語、中国語などについても、国内に住む人々をラテン文字で教化するという理由でラテン文字化が検討され、あるいは計画が発表されたのも、このような統一の志向の一端であった [Martin(2001), 199]。

しかし、結局のところ、ロシア語もラテン文字化しなかったし、ウクライナ語、アルメニア語も同様であった。

「進んだ民族」あるいは「遅れた民族」という単語はこの時期の社会主義の文献に多く出てくる。この二項対立において「遅れた民族」には「東方民族」ということばが重なり合っていた。1932 年に教育人民委員会の作成した「文化的に遅れた民族」のリストにある 97 の民族はギリシャ人、ブルガリア人を除くとほぼ全てがアジア地域にいる民族と重なる [Martin(1994), 167]。「遅れた民族」という考え方には、「進んだ」キリスト教の下に遅

れた他の民族を教化する」という発想が窺えなくもない。そして、意識的であれ、無意識的であれ、決定権のある中央にいる人たちによってそのような「選別」が行われたように見える。

こうした形で選別された人々に対して、ラテン文字化が実行されていくのである。

しかし、逆にレッテルを貼られた民族が自称として「遅れた民族」ということばの利用する場面を見ると、恥を感じてレッテルを取り外したいというような使い方はみえない。むしろ、過去と比較して現在の成果を強調する場面で使われ、「抑圧された代償として」あるいは「進んだ民族に追いつくために」より多くの予算を要求するためのレトリックとして積極的に利用していたようにも見受けられる。

土着化

以上のようなラテン文字イデオロギーを生み出すきっかけとなったのは、土着化という政策である。

革命後にポーランドとして独立した領域にはウクライナ人や、白ロシア人が住んでおり、国境を挟んで彼らは分断されることになった。これに目を付け、少数民族に固有の領土を持たせ、言語・文化を保証し、自治を行わせることによって国境の外にいる白ロシア人、ウクライナ人たちを惹き付けるために土着化の運動は始まったのだとマーチンという[Martin(1994), 8-9,36]。また、1924年にドニエプル川の左岸に成立したモルドヴァ社会主義ソヴィエト自治共和国は、ルーマニアに併合されたベッサラビアを回収することと関わりがあるが、時期的に見てこの政策の一環と考えて良さそうである。

土着化は、それ以前の内戦時代に、少数民族居住地域が非常に重要な意味を持ち、その協力を取り付けるために行われた懐柔策が、その後にも引き延ばされたものであるというような論もある。確かにそのような懐柔策はあったが、その後理由を付けて約束を反故にせず、さらにソヴィエト連邦が崩壊するまで民族自治が存続したのを考えれば、それだけでは論理的に考えてもあまり説得力がない。

また、対外的な宣伝、特に東方における宣伝効果を狙ったものだという意見もある。これは、国境の外の人々という意味でポーランドへの対外宣伝が、しだいに拡大され、展開されたものと考えれば納得がいく。つまり、西に向いていた宣伝効果を、東にも振り向けたということである。もちろん、東方政策もまわりまわって西に対する宣伝であるという風にも考えられなくもない。植民地政策への影響という点でもそうだとはいえるし、情報が、いったん西側による評価判断を加味されて各地に拡がるという傾向があることからそういえそうである。

土着化の意図するところには、帝政時代の支配言語であったロシア語に対する否定的な態度から、その領域においてはその地域の言語が使われなければならないという計画も含んでいた。このため、新聞、教育、そして政府において作成される文書に至るまでがその土地の言語で行われるよう、スケジュールが組まれ実行に移された。まず、そのような試みが開始されたのはウクライナであった[Martin(1994), 75-124]。

同様の計画は、中央アジアや極東の諸民族や本研究で考察するブリヤートやカルムイク

においても考えられていたが、現実にかかなりのところまで機能したのはウクライナだけであったようである。というのも、他の少数民族においては、教育機関はさておき、特に政府のそれぞれの部門で働ける人員の絶対数が足りなかったからである。

その事例として以下にカルムイクにおける1926年9月当時の政府機関に務めていた職員の民族籍別の構成を挙げる。これは政府機関の「土着化」を始めるに際して、政府が実態調査を行った結果であるが、ほぼ全ての機関で20%を切り、経済関係に至ってはほとんど人員がいなかったことがおわかりいただけるだろう。

表 1-1、カルムイク自治州における州機関の職員構成

州予算でまかなわれている機関

	総計	カル	ロシア	ユダ	タタ	ドイ	ウク	アル	ポー
州執行委員会	21	4	11	1	1			2	1
州執行委員会組織部	4	1	2						1
州社会保障局	6	1	4				1		
州教育部	17	4	12	1					
公文書ビューロー	4		4						
州計画局	7		6			1			
州行政部	27	7	18	1				1	
合計	86	17	57	3	1	1	2	3	2

国家予算でまかなわれている機関

検察局	23	1	19	1	1			1	
軍組織管理局	14	5	7					2	
師範学校	21	1	18	2					
州保健局	20	1	17	2					
土地管理局	54	7	41	2	2			1	1
州経理局	96	10	79	1		2	2		2
州裁判所	38	7	28					3	
州統計局	13	1	8	1		1		1	1
ソヴィエト党学校	28	7	18			1		2	
労農監督部	12	2	10						
領内交易部	10	3	5	1				1	
労働部	8	4	3	1					
合計	337	49	253	11	3	4	2	11	4

企業などの経済機関

州労働組合	60	8	46			2		4	
州漁業中央管理局	25	2	22					1	
州出版局	75	6	66	1		1		1	
州保健局付属薬局	37	1	27	5	1	1		2	
合計	197	17	161	6	1	4		8	

(表の一番上にある二文字は以下の民族をあらわしている。カル=カルムイク、ロシア=ロシ

ア人、ユダ＝ユダヤ人、タタ＝タタール人、ドイ＝ドイツ人、ウク＝ウクライナ人、アル＝アルメニア人、ポー＝ポーランド人、また表内の？は筆者によるもの) [P3/2/752/1]

一方、ブリヤートにおいては、土着化により少しでもブリヤート語で文字を知るものたちが必要になったために政府機関に引き抜かれる教師が続出し、教員の教育レベルが著しく低くなるという現象も起きていた[Montgomery(1994), 250]。

また、カルムイクにおいては、土着化のスケジュールを決めようとした段階で、政府で働く人々の役職、民族籍、給与に至までのリストを作成しているが、ここでは非常に興味深い情報がえられる。つまり、多くの政府機関において、リストの筆頭にカルムイク人がトップとしておかれることが多いが、それを除くとほぼリストの下の方にカルムイク人たちが固まっているという現象である。例として州執行委員会行政部職員の表をここで挙げることにする。

表 1-2、州執行委員会行政部の職員と警備員（1926年9月1日現在）

役職	名前	民族籍	給与
部長	ドルギン	カルムイク	169-21
副部長	パブロフ	カルムイク	143-05 (上から線、退職か?)
書記	ゲネロゾフ	ロシア	60
出納係	コロヴィン	ロシア	100
事務員	ピケリニク	ロシア	37-80
戸籍管理局長	ポポヴァ	ロシア	45
統計管理員	ドゥリキン	ロシア	45
統計管理員	ベクレムシェフ	ロシア	90
統計管理員	クルギン	ロシア	37-80
タイピスト	ディフマン	ユダヤ	37-80
記録係	イヴァノヴァ	ロシア	25-20
清掃係	フョドトヴァ	ロシア	16-20
清掃係	オフシャンニコフ	ロシア	60-30
警備員	リジエフ	カルムイク	25-20
警備員	エレシキエフ	カルムイク	25-20
警備員	コルシャエフ	カルムイク	25-20
警備員	コロソフ	カルムイク	25-20
警備員	サゾノフ	ロシア	25-20
警備員	ボロニン	ロシア	25-20
警備員	ミニュシン	ロシア	25-20
警備員	ニキフォロフ	ロシア	25-20
警備員	メドヴェージェフ	ロシア	25-20
警備員	ポロゾフ	ロシア	25-20
警備員	シャホフ	ロシア	25-20
警備員	シュミリナ	ロシア	25-20
警備員	アタヴィン	アルメニア	25-20

警備員	ゲンゲエフ	カルムイク	25-20
警備員	アシタエフ	カルムイク	25-20 [P/3./752/11]

つまり、各政府機関のトップにいるのは、「その領域に名付けられた名称を帯びた民族」(titular national以下「名称民族」)であっても、実際に、機能させていたのはロシア人を中心とした人々であり、従って、政府内での「公用語」はロシア語であったことが容易に想像できる。また、マーチンは、タタールとカザフにおいて、職員の「土着化＝民族化」の人数あわせのために、助手や清掃婦など、下働きの職を与えて、人数あわせをしていた事実も指摘しているが、あきらかにカルムイクにおいても同じことが行われたように見える[Martin(1994), 141]。政府の理想は高かったが、現実と、地方にいる人々の認識は別だったようである。

上からの働きかけなければ、地方の状況に変化が起きないため、上から強制的に言語的な土着化も行われていた。カルムイクにおいては、実験的に、まず、1927年5月より、ホショート・ウルスにて「土着化」が始められたが、9月2日付けで州執行委員会に送られた文書には、職員たちに従う様子が無く、サボタージュにあっていることが訴えられている[P3/2/752/98]。また、同じ時期に検察庁において、カルムイク語で行政ができるようカルムイク人が新しく雇われることになったが、州執行委員会に送られてきた11月29日付の文書には、二人とも能力がないので解雇したいとの申し出が書かれている[P3/2/752/194]。同じ頃、雇われている二人からも執行委員会に対して、検察庁においていじめにあっている現状を訴える手紙が送られてくる[P3/2/752/195,196-197ab]。最終的にこの事件は他の人員がいなかったため彼らを「そのまま職に置く」ことで決着する[P3/2/752/198]。どちらの主張が真相であるかは明らかでないが、ロシア人からのいじめ、土着化にあぐらをかいた名称民族の怠慢、ともに様々な地域で見られた現象のようである。

本研究で考察するような言語政策が目指したところは、自治が与えられた名称民族による領域内の公的な活動における言語の民族化及び土着化であったが、現実のところは、行政組織の言語にそれほど変化はなく、教育、マスメディアにおける領域への効果に留まったということになる。が、先ほど教師が不足していたことを指摘したように、人材の要請と確保に問題があり効果があったかどうかを評価するのは難しい。

しかし、話をウクライナに戻せば、他の言語と違い、新聞や、学校教育において、少なくとも印刷されたものの言語のウクライナ化はかなり成功していた。

さらに民族化＝ウクライナ化が進展するにつれ、中央からの出先機関や中央との通信においてもウクライナ語を使うべきであると主張する人々が出てくる。彼らと中央やその出先機関の人々で働く人々との間に対立が生じ、それぞれの意見に中央からの後ろ盾を得ようとする両者からのアピールが中央へ何度も送られるが、解答されぬままにおかれる。1932年にいたっても全連邦的な機関に関してはほぼロシア語が作業語として残り、言語の土着化は、これ以上は進まぬ状態となる[Martin(2001), 118]。

後述するように、最終的に言語における「土着化」は放棄されることになるが、このことによって非ロシア民族寄りの政策が放棄され「ロシアへの同化」のみが押し進められたとするのは誤解がある。というのも、人材に関する「土着化」はその後も、ソヴィエト崩

壊まで続き、学校、政府機関などには多くの非ロシア民族が勤務しているからである。

1-2, キリル文字化政策期

1930年代後半にはラテン文字化運動は減速し、次第にキリル文字への以降が話題に載ってくるようになる。1933年夏にはタタールの州委員会第一書記であったラズモフがラテン文字を廃止、キリル文字化を提案した。この時、ラズモフは「激しい叱責」を受けたという[Martin(2001), 418]。しかし、1934年、中央執行委員会文化扇動部がまとめたラテン文字化の方針はこのような雰囲気に変化が現れていることを示すものであった。

a), 大部分が海外に住んでいる民族の言語はラテン文字化しない(例: 朝鮮語、ペルシャ語)

b), バイリンガルであるか、非常に少数の話者しかいない言語はラテン文字化しない

c), 現在、キリル文字を使っている言語に関してはキリル文字化しない

ここからはラテン文字化による「統一」へ向かう方向性からの後退が見うけられる

[Martin(2001), 419]。

1935年にははっきりと方針の転換が見えてくる。1935年7月ソヴィエト連邦最高ソヴィエト中央執行委員会幹部会でラテン文字化が概して成功裏に完結したと述べられたが、同じ幹部会で一ヶ月前には、ある一部の北方民族やその他の民族にラテン文字を導入する新アルファベット委員会の行為は深刻な間違いだと非難されていた[Исаев(1979), 83; 森岡修二(1974), 17]。さらに翌8月の同幹部会では新アルファベット全連邦中央執行委員会に対して、それまでの文字を作成する活動から正書法、術語、そして文字といった言語の発展に関する問題を扱うよう提案がなされるのである[Исаев(1979), 83]。なお、最後のラテン文字化案も同じく1935年に発表されている[Яковлев(1936), 33]。

これを受けて地方でも、今までの活動を総括するような言語学会議が様々な地域で行われる。1936年3月チュバシで行われたチュバシ自治共和国の言語建設に関する報告がなされ、同年ウドムルト地方共産党でも言語建設に関する報告がなされたことはその一例として挙げられる[Исаев(1979), 83]。また、これはモンゴル系とて例外ではなく、一番活動が活発であったブリヤートにおいては、1936年1月には言語会議が行われるよう準備されていたのである[P471/184/52]。

こうした傾向を受けて、1936年からぼつぼつとキリル文字化を採用する言語も現れる。1936年4月、最初にキリル文字化を決めたのは北カフカス言語のカバルディノ語であった。1936年8月、第一回全ソヴィエト自治共和国教育人民委員会は、ソヴィエト連邦教育人民委員会が、「ロシア・アルファベットは封建的因襲的な異物を帯びている」という観点から活動をする偏向に対処していないと新アルファベット委員会を非難した[Исаев(1979), 255]。こうしてラテン文字化がイデオロギー的に否定される。1936年12月には、ソヴィエト連邦中央執行委員会民族会議部会がさらに北方諸言語に対してキリル文字の導入を決めるなど、キリル文字化が本格化してゆく[森岡修二(1974), 24; Исаев(1979), 255]。

ロシア語の地位の向上

ラテン文字化が強調された時期には、諸民族の文字や言語に対してキリル文字とロシア語の否定的な面が強調されてきた。

しかし、1930年、『諸民族の啓蒙』に掲載された「民族文化建設におけるロシア語」という論文では、キリル文字化へと移行していく時期に盛んに語られるようなソヴィエト時代の新しいロシア語が持つ次のような意義が強調されている：

- 1) 経済建設と文化建設の政策において多くの人々に広まった人々の交流する手段となる言語である
- 2) レーニン主義の言語である
- 3) より高度な水準のマルクス＝レーニン主義的な批判ができ、かつ、より高度な水準の階級的な政治的な文化を持つ言語である
- 4) より高度な物質文化と技術文化をもつ、西欧の技術の成果を吸収した言語である
- 5) ロシア語は高度な専門知識の必要な人材を養成するための主たる言語である
- 6) 最も遅れた民族においては、将来母語で教えるようになるための中等及び高等教育機関の人材養成をするために必要な言語である[Ванно(1930), 38-39]

なお、この雑誌には、その後、1933年、チェチェンにおける授業でのロシア語とチェチェン語の状況を紹介する記事が出るまでは、ロシア語をタイトルとした記事は発表されていない。しかし、1934年になると、ロシア語の教育に関する記事が散見されるようになり、1935年には毎号のように複数の記事が載るようになる。

キリル文字への移行が強まっていく時期、キリル文字の利点を強調する議論には、ラテン文字より文字が多く、民族語の音をより正確に表現できるということと同時に、ロシア語の教育が容易になる点が挙げられていた。イサエフも著書の中で、キリル文字化は「子供達の（アルファベット修得を）容易にする。[なぜなら]ソ連邦全域で彼らは同じ文字を学ぶことになるからだ」と強調している[Исаев(1979), 255]。

確かに最初にキリル文字化が決められた北方諸言語にとって、ラテン文字は馴染みがなく、キリル文字は都市でロシア人と交流する時に見る馴染みのある文字であったかもしれない。しかし、少しでも考えてみればわかることだが、ロシア人がどんな外国語教育を受けるとすれば、英語、フランス語、ドイツ語といった別の文字で書かれる言語を教育されているはずである。だからといって、ロシア語の文字をラテン文字に変えよという議論はなかった。ソヴィエト期の最末期になるまで、国家語の地位を認められなかったロシア語であるが、実質的には、すでにこのころには以前の抑圧者の言語という評価を脱し、レーニン主義の言語になっている。こうして、ロシア語の教育の意義が強調されはじめるのである。

よって、1930年代後半から民族共和国などでロシア語学習熱が昂揚するのも不自然ではない。例えば、1937年のアディゲ共産党地方委員会では1927年に1788人だったロシア語学習者が、10年後には1,0903人になったことが報告されている。また、同年のキルギス共産党大会でも「我々は全連邦的な文化に交わりなくてはならない。この文化の最高のものを身につけなければならない。これはロシア語を我々が完全に習得することによって初め

て可能となる」とロシア語の必要性を説いた[Исаев(1979), 259]。そしてウズベキスタン共産党第8回大会では、「ポリシェヴィキの言語であり、民族間の交流の手段であり、科学技術の知識の領域で民族幹部をより完全にすることであるロシア語を学ぶこと」をウズベク人共産主義者の課題とした[Исаев(1979), 259]。そして1938年に教育科目としてロシア語の義務化が始まるのである。

上述の6つの理由に加えて、ロシア語は「ポリシェヴィズムの言葉」として全ての人々が学ばなければいけない言語になったのである。そして、それはただ商業や行政などといった理由でそうするわけではなく、「文化の最高のもの」を身につけるために必要だったのである。また、ラテン文字が「共産主義共同体文字」と見なされたようにキリル文字は「社会主義文化」の文字となった。こうしてロシア語の民族の交流の言葉「族際語」としての地位が確立し、同時にロシア文字への移行がすすめられてゆく。しかし、ロシア語が「社会主義文化の担い手」と見なされた背景はなんだろうか。

「ソヴィエト」という名の文明

これらの政策の根拠として考えられるものは、多くの研究者が語るように単純にあからさまな大ロシア主義への転換といってもいいのかもしれない。また、民族政策を転換させる要因になったのは、ソヴィエト政府が外に対して積極的に影響力を行使しようとして「土着化」を推進していたが、その後頻発したロシア人と非ロシア人、あるいは非ロシア人同士の民族間の様々な衝突や紛争などによって、次第に外とのコンタクトを持つ民族や人々に恐怖心を感じるようになり、ソヴィエト連邦を構成する民族のなかで一番大きく、中心的な存在であるロシア人たちに頼ることを考えるようになったことにあるのではないかと考える研究者もいる[Martin(2001), 356]。

この転換の「内容」がどうであれ、「形式」は民主的、社会主義的な理論に則っていなければならなかった。そのような、表向きのイデオロギーの流れからすれば、ロシアを中心とすることの正当性の根拠と考えられるのは1936年に社会主義段階を達成したとする宣言である。つまり、1924年、一国社会主義を宣言し、翌年、「ロシアのような経済的・技術的に後進的な社会でも、「完全なる社会主義社会を建設しとげることができる」というその「社会経済的」な命題が提示されたが、その答として、1936年11月、スターリンが「わがソヴィエト社会は、社会主義を基本的に実現し、社会主義制度を建設できた。即ち、マルクス主義者が共産主義者の第一段階もしくは最低の段階とちがった名で呼んでいるものを実現するにいたった。つまり、わが国にはもはや根本において、共産主義の第一段階、すなわち社会主義が実現されているのである」と宣言したことにあると思われるのである[石井規衛(1995), 244]。さらに1936年12月には憲法によって社会主義社会を建設した党の指導的立場がうたわれることになる。現実かどうかは別として、理論上、宣言された「社会主義社会」を根拠に、そこへの参入の条件として、社会主義社会を作り上げた「偉大なロシア人」または共産党との友好関係やロシア語の学習そして、ロシア文字の導入がソヴィエト領内の諸民族に課せられたのだと見ることもできると思われる。

1934年1月26日から2月10日までおこなわれた第17回共産党大会ではすでに民族関係

や、民族政策において大ロシア排外主義は中心的な危険とは考えられなくなっていた。それはスターリンが地方民族主義に関してより危険であることを強調したことで明らかであった[Martin(2001), 361]。

1936年6月、ブリヤートで行われた言語会議においてダンプロンは言語政策におけるツイビコフ(1930年死去)の西欧寄りの活動を批判して、次のように発言する。

ツイビコフ教授はソヴィエト連邦を新しい文明の源と見なそうとしなかったし、科学的、技術的な本当の繁栄の源とは見なそうとしなかった。彼はブルジョワ的西欧文化を崇拝していたのである。・・・だからソヴィエト連邦を彼ら(民族民主主義者)は、通過点、つまり、ブルジョワ西欧文化をブリヤート・モンゴルに広めるための橋と考えていたのである[Дампилон(1936), 11]。

スターリンが社会主義段階の達成を宣言したのは彼のこの発言の4ヶ月ほど後だが、ラテン文字を通して「西欧の文化」を取り入れようとしていたツイビコフに対して、「ソヴィエト連邦」を「文明の源」と見なしていないと批判したこの発言の意味は大きい。つまり、もうこの頃には「ソヴィエト」は「文明の源」としてイメージをされていたことを表しているからである。

そして、その文明の源を作った中心となるのはロシアに「偉大なる」革命を起こした「偉大なる」ロシア民族だったのである。

文字に対する態度もこれを根拠に変化することになる。

ラテン文字が「革命の文字」とされたように、「偉大なる10月革命の文字」がキリル文字とされた。

ラテン文字化は「外に対して影響力を行使しようとした時期」において、やはり、西側を含め、様々な地域へ、「ロシア化をせず、積極的に文明化を助けている」という対外宣伝においては非常に有効であった。しかし、外とのコンタクトを断ち切り、ロシアを中心とした「諸民族の友好と団結」による国家を築くことになれば、キリル文字化への志向は当然の帰結であった。

ある回想録から

こうして、北方民族を始まりとして、ラテン文字化をすでに実行していた民族のキリル文字化へと動いてゆく。キリル文字への移行の中でウデヘ語のように人口規模の小ささから「文字を失う」民族語もでてくる。

アゼルバイジャンのキリル文字化がどう始まったかに関しては『アゼルバイジャン・インターナショナル』という雑誌の2000年夏号に興味深い記事がある。記事を書いたアゼルバイジャン作家同盟の会長であり、国会議員でもあるアナルの父親もやはり作家同盟の会長であった。彼がキリル文字化と彼の父親との関係を語っているところなどを長いがここに引用することにしたい。

私の父親、ラスル・ラザは1939年の一年だけ作家同盟の会長だった。私はまだそのころ2歳だった。スターリンの粛清が最高潮に達した時期で、朝早くに悪名高き黒いヴォルガという車が人々のアパートの前に意味ありげに止まることのあるような時期だった。…

私の母親、詩人のニガル・ラフィベイリは、よく、ある日人々に愛された詩人サマド・ブルグンと父親が帰ってきたときのことを語ってくれた。父は母に何か食べるものと飲むもの、つまりウオトカを出すようにいった。母は何か非常におかしいと感じた。彼女は正しかった。アゼルバイジャン共産党第一書記で、アゼルバイジャンでのスターリンの右腕だったミル・ジャファル・バギロフが、彼ら二人を呼んでラテン文字と呼ばれた文字からロシア・アルファベット、つまりキリル文字に変えようとする問題を提出して欲しいと命じたのだった。

異議申し立てをする余地はなかった、指令は直接スターリンから下されたのである。こうして父とブルグンは夕食をともにし、彼らの運命と、10年前に採用されたばかりのラテン文字の運命を嘆いた。彼らは変化に対してあえて反対をすることはなかったし、彼らが行わなければならない命令を激しく嫌っていたことを誰にも見せることをしなかった。彼らはその案に完全に賛成しているかのように立ち振る舞わなければならなかった。他の選択肢はなかったのである。

…

後になって、私たち家族はバギロフ自身が最初にキリル文字に替えるという話を聞いて気を悪くしていたということをきいた。その当時、バギロフはティムル・ヤブボフの家族ぐるみにつきあいのあった友人だった。ティムルは1939年の初め頃バギロフとともにモスクワのクレムリンに赴いた。ティムルはバギロフがスターリンの執務室からバギロフが出てきたときのことを覚えていた。自分が体験した何かからバギロフはあきらかに震えていた、というも彼の震える手から書類が床に滑り落ちていったからである。ティムルがどうしたのかを尋ねると、バギロフはスターリンがアゼルバイジャンでのキリル文字への移行を実施する命令をたった今受けたところだと答えたという。…[Anar(2000)]

この回想には、今まで多くの研究者が考えたほぼその予想通り、自発的ではなく、強制的にキリル文字化が実施されていったということが示されている。全ての地域において、このような劇的な場面が展開されたかどうかはわからない。多くの地域で、今までの総括的な会議が行われ、ラテン文字化は成功したとされた上で、上記のようにロシアとの絆を強調した上でキリル文字化してしまったところも多い。それぞれの地域におけるその発端について語られることがなかったキリル文字化だけに大きなその方針の転換の謎を解く貴重な証言である。

こうして開始されたキリル文字化は、民族主義的な発言をした人々が大粛清によって次々と消えてゆく中で行われたためか、ラテン文字化の時ほどの反論や抵抗の記録が残っていない。

そして、1940年代の初めにはほぼ全ての地域においてキリル文字化が完成するのである。

1-3, 「国際」的な語彙の問題

ここまでは文字の問題であったが、同様に、語彙の問題もソ連邦の言語政策において重要な問題であった。

特に、共産主義用語として頻繁に使われるようになった様々な「国際的な」語彙などの扱いに関してはロシア語以外の民族語においても、非常に注意が払われた。

「国際的な」に語彙の扱い使いに関して、エンゲルスが科学技術用語の翻訳は、内容を歪めるだけであり、説明ではなく混乱であると述べていることなどマルクスの創始者たちの引用をかりて、ソ連邦において次のような原則が引き出されたと田中克彦は言っている：

- 1) 国際的になった用語は翻訳してはならない。さもないと意味を歪めてしまう
- 2) しかし外来語彙の乱用は慎むべきだ。その言語に明晰に表現できる言葉があれば借用すべきでない[田中克彦(1975), 189]

同じ表現は1934年のカルムイクで行われた言語学会議の場でも聞かれている[Хальмг(1935) 33]。

1933年2月に行われた新アルファベット全連邦中央委員会の「ソ連邦諸民族の言語と文字」と題された会議で幹部会からの提案としてなされたものも、語彙の創製に関してはそれぞれの民族の文化程度を考慮すべきとしながらも、もし国際的な語彙を導入するのであれば、名詞はそのままの形で入れるべきだとしている[Языки(1933), 275]

バスカコフは「ソヴィエト連邦内の大部分の言語と術語の発展」を次の三つに分類している。

1) 1917年から1929年：革命前までの術語を批判し、古い（例えばアラビア語やペルシャ語の）術語を人工的な、純化主義的な（甚だしく「民族的な」）語彙に置き換えた時期。このような動きは、しばしば、もともとの術語の意味を歪めることもあったという。また、この頃はロシア語が入って単語はその言語の発音で書かれていた

2) 1929年から1945年：急激な社会主義経済と文化の発展に結びついたロシア語の語彙や国際語彙のより強い自然発生的な普及の時期

3) 1945年以降：民族語の術語創製の時期。この時期にはロシア語と国際的な語彙をもとにしたソヴィエト連邦内諸民族の文章語の全般的な語彙の全体像がはっきりしてくる[Исаев(1982), 93-94]

1920年代のブリヤートの語彙政策に関して、シャグダロフも同じく純化主義的傾向があったと解説している[Шагдаров(1967), 79]。カルムイクにおいては1928年の会議で、コシエフの発表に基づいて、同じように、カルムイク人のことばの音韻法則に従って書くことを決めていた[P3/2/1144/111]。

1931年、モスクワでブリヤート、モンゴル、カルムイクの代表が集まった会議では、国際語や外来語を民族的な形（つまり民族語の語彙）で取り入れるのは適切であり、その言葉を翻訳するとき、あるいは、母語を用いて言葉を作るときは、内容を翻訳するのであ

て、その外国語の形を翻訳してはならないと決めたという。また、それと同時にそのまま国際的な語彙を入れる場合には、民族語の発音通りの、民族語の正書法に則った綴りで書くことを決めたという[Конференция(1932), 74-76]。

それに対して早速、中央から派遣されたポップは1931年のブリヤート・モンゴル語学戦線問題学術会議や、西ブリヤート言語文化向上会議で、「国際」的な語彙が翻訳されていることや、翻訳された言葉も歪められていることを批判している[Поппе (1931b), 54-55,57-58 ;Поппе (1932a), 28-31]。

また、1936年の言語会議でのダンピロンの借用語についての同様の発言で「国際」的という言葉は、共産主義思想とともに入った語彙をブリヤート語におきかえようする動きを批判する意味で使われている[Дампилон(1936), 34-38]。

だが、実際のところ、1932年、ブリヤート人社会活動家バラディンが正書法の問題について一問一答で答えた論文に通りに、1936年まではロシア語そのままの綴りでなく、ブリヤート語で発音された通り書かれていた[Барадин(1932), 21-22]。ペテルブルグ大学教授N.ポップは弟子のブリヤート人にあてた手紙の中で、この正書法で書かれた作家マキシム・ゴリキーのブリヤート語の綴り「Magsiim Goorki」をみて「何と驚くべきものでしょう！」と書き残している[Хамарханов(1998), 103]。このような綴り方は、1936年の言語会議で批判され、8月20日の会議終了時の決定ではロシア語そのままの綴りにすることを決定された[Дампилон(1936), 46]。

それでも、語彙的にも綴り的にも「ブリヤート語化」させる動きは止まらなかったのか、キリル文字化を審議する1938年の言語会議でも、「国際的な借用が、必要以上にモンゴル語に翻訳されていることが警告され、またロシア語文献からの翻訳は自由訳であってはならず、直訳でなければならないし、国際的に定着した用語はロシア語そのままのかたちを導入しなければならない」と再び批判されている[田中克彦(1975), 160]。

カルムイクに関して1930年代の資料はそれほど残っていないが、1934年の言語学会議においては、「国際語」につける接尾辞をどうするかが話し合われているのみであり、すでにロシア語つづりを転写した形で書くことがほぼ暗黙の了解になっていたようである[Хальмг(1935), 116-122]。

このような語彙の「国際化」はブリヤートやカルムイクのみならず、ソヴィエト領内の民族語の他の様々なところで見られた[Lewis(1972), 172-174]。

モンゴル語で「資本」を表すことばは「酵母」ということばからきている。酵母をいれれば、乳が発酵し膨らんでゆくように、資本を投下すれば、資本が膨らむ。こういう形で「資本」を捕らえるのは、遊牧形態の生活世界にある人であれば非常にイメージが湧きやすいはずだが、ソ連邦の為政者はそのような「歪曲」を許さなかった。

ブリヤートでは、この「資本」を初め、「共産党」や「共和国」など、今でもモンゴル語に残る多くの語彙の翻訳がなされていたが、それらは、いつの間にかロシア語に置きかわった。

置き換えの強制は一時期明らかに行き過ぎと思われる時期もあった。

シャクダロヴァは「ロシア語からブリヤート語への文学作品の翻訳における借用語について」という論文の中において、1935年に出されたツルゲーネフの『ムム (м у м у)』

とその改訂版として出された1947年版の語彙の差を比較し論じている。1947年の翻訳は1935年のものより、訳が原文から遠くなっており、訳語がもともとびたりと合うものが存在する場合もロシア語をそのまま入れているのだという

例：獣医、*малай эмшэ* (1935) → *ветеринарна врач* (1947)

台所、*тогооны гэр* (1935) → *кухни* (1947)

また、1947年の翻訳は「ぎこちない文字通りに逐語的な」訳であり、「しばしば間違っただ借用語が多く存在した」という[Шагдарова(1992), 70-72]。

こうして、ロシア語と同じキリル文字を導入することで、ソヴィエト領内諸民族言語の近代語彙は、ロシア語をほぼそのままの形で導入することになり、目に見える形でロシア語の影響が強く現れることになった。

これから、検討を加えるブリヤート、カルムイク、モンゴルに関しても、ほぼ、以上に述べたようなソヴィエト全体の概略と同じ形で言語政策が進んでゆく。ここでは、モンゴル諸語などを含めた名称民族へのソヴィエト連邦全体という文脈から見た影響に関しては述べる事ができたと思う。テーマを諸地域に移す前に、次の章では、もう一つの背景として、モンゴル諸族がこれまで使ってきた文字に関して若干振り返って見ることにしたい。

ⁱ [田中克彦(1975), 155]での表現による